SCJ 54

ハイチ

ジョゼフのストーリー

緊急支援の途中報告

スタッフの「被災地でのこと」





3歳のジョゼフと叔母のイマルラ22歳。仮設テントの前にて

地震の日、瓦れきの下に埋もれてしまったジョゼフ。
助け出してくれたのは、叔母のイマルラだった。
パパとママはすでに亡くなっていた。
その日から、ジョゼフはイマルラのことを
「ママ」と呼んでいる。
でも、亡くなったママのことは忘れることが出来ない。
思い出すと、苦しくなる。

そのジョゼフが笑顔を見せる場所がある。
学校の跡地に開かれた青空教室。
新しい友だちや優しい先生が100人も集まって、
わいわい、がやがや。

「なんか、家族が増えたみたい」

ジョゼフは毎日、学校が楽しみでたまらない。

2010年2月17日 ハイチ/ポルトープランス ＳＣの支援する青空教室

教室はぎゅうぎゅう詰め。それでもみんなと一緒が嬉しい



皆さまからのご支援をハイチの子どもたちに届けています

——震災から2ヶ月間の子どもたちの様子をお伝えします



1. 1月12日午後5時前（日本時間13日朝）、ハイチでM7.0の大地震が発生。首都ポルトープランスの路上で一夜を過ごす被災者たち。



4. 隣国のドミニカ共和国のSC倉庫。ここから食料、水、衛生用品、医薬品などの緊急物資がハイチまで運ばれた（1月15日）。



7. 配布した衛生用品の一式。タオル、歯ブラシ、歯磨き粉、石鹸、シャンプー、トイレットペーパー、おむつ、生理用品、消毒アルコール。



2. 海岸沿いの丘に密集する家々も倒壊。都心で職を見つけられなかった人やその子どもたちが暮らしていた（1月14日）。



5. 水を求める被災者たちの手（1月16日）。



8. 避難民キャンプで子どもが石鹸で全身を洗ってもらっていた。衛生管理が何より大切（1月18日）。



3. ハイチに集合したSCの緊急支援チームは、休む間もなく調査と支援を開始した（1月14日）。



6. ペットボトルの口を向けると、女の子は水をゴクゴク飲み始めた（1月17日）。



9. 仮設診療所では子どもたちが治療の順番を待っていた（1月29日）。

写真のクレジット：Laurent Duvillier/SC(p.2) Louise Dyring Nielson/SC Denmark(p.3)

SCはセーブ・ザ・チルドレンの略称です。
SCJはセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの略称です。



16. わくわく興奮する子どもたちの間で、教師たちも笑顔でノートや鉛筆を配る（3月5日）。



13. 被災地域の学校の多くが何らかの被害にあった。教師たちは子どものために青空教室を開いていた（2月17日）。



10. 医療チームはいくつかのキャンプを掛け持ちして今も診察にあたっている。ヒゼンダニやマラリアなどの感染症の蔓延が心配される。



17. 母親が静かにくつろいで授乳できる「ベビー・テント」。赤ちゃんの栄養不良や下痢を防ぐために母乳育児を勧めている（3月9日）。



14. 教育専門スタッフのリサは崩れた学校を調査中。耐震性のある校舎を建てることが今後の課題（2月26日）。



11. ここは「チャイルド・フレンドリー・スペース」。どんな緊急事態にあっても子どもが子どもらしくいられる場を作ることがSCの使命（2月2日）。



18. 2月に出産したばかりのラシェル。震災後も新しい命がたくさん生まれている。SCの支援もこれからが正念場だ。



15. この日、首都郊外のスラム地区で授業が再開された。今はテントを張っただけ。それでも子どもたちは嬉しそうだった（3月5日）。



12. 遊び場で絵描きに夢中になる男の子（2月9日）。

写真のクレジット：Joe Raedle/Getty Images(1) Frederic Dupoux(2) Win McNamee/Getty Images(3,5) Adriana Zehbrauskas/Polaris(6,8) Louise Dyring Nielson/SC Denmark(7) Marco di Lauro for SC/ Getty Images(9,10,11) Robert King/Polaris(12) Laurent Duvillier/SC(13,14) Rebecca Janes/SC(15,16,17,18) Save the Children(4)

スタッフ日記――SCスタッフ2人の「被災地でのこと」

死と生の間で



SC緊急対応アドバイザー
イアン・ロジャーズ

SCのハイチ事務所で被災。12日夕方、仕事をしていると、グラっと突然揺れ出した。揺れが激しさを増し、ガラスが割れる、建物が崩れる、悲鳴、子どもたちの泣き声。聞こえてくるすべての音が、全身を恐怖で包んでいった。次の日、街に出た。瓦れきに埋もれた人を助けようと必死に声を掛け合う人、その横で呆然と立ちつくす人。夢でも見ているようだ。いや、夢であってほしい。あれから1週間、世界のメディアは略奪や暴動のことをよく伝えるが、被災者の多くは辛抱強く、みんな助け合っている。瓦れきの下には生きている人がまだいるようだ。3日前、事務所の近くで2歳の女の子が助け出された。僕らのやらなければならないことは、これからたくさんある。〈1月19日（火）〉

今だけは……



SCアメリカメディア担当
ターニャ・ワインバーグ

仮設診療所から戻って一息ついていると、子どもたちがにこにこして近づいてきた。自分たちの英語がちゃんと通じるか、私に試すつもりらしい。子どもたちのたどたどしい英語と、私のたどたどしいクレオール語。そこで、お互いにレッスンをすることにした。クレオール語は難しい。なかなか覚えられないでいると、高校生くらいの少年が背負っていたリュックから辞書を取り出す。文字を指さしながら、一つひとつ熱心に教えてくれた。まるで学校のようだ。その彼がつぶやく。「学校の校舎が倒れたんだ、本当は勉強を続けたいんだけれど、もう出来ないよ」その瞬間、私と子どもたちを悲しい雰囲気が包み込む。でもそれも一瞬だけ。「今だけはあれこれ考えるのをやめて、この時間を楽しもうよ」気持ちを分かち合った私たちの即席の授業は、その後も笑いが絶えることはなかった。〈2月24日（水）〉



●SC事務所の所在地。被害の大きかった地域でもある。

◉ハイチ共和国

子どもは約430万人。総人口の半数近くを占めます。出生1000人あたり72人が5歳の誕生日を迎えずに亡くなっています。小学校に通う年齢の子どもの半数が学校に通えていません。貧富の差が激しく、総人口の80％が1日2ドル以下で生活しています。（出典：The State of World's Children 2010ほか）

◉ハイチでの セーブ・ザ・チルドレンの活動

1978年からSCアメリカを中心に支援を行っています。自然災害が多発するハイチで、ここ数年は地域に密着した防災などに力を入れてきました。また、ストリートチルドレンの保護や奨学金の提供、地域の教育や医療の充実、HIV・エイズの拡大防止や感染者のケア、貧困家庭の家計支援、ハイチ政府への働きかけなど、さまざまな活動を行っています。

みんなの声

アフガニスタンの人々の様子を知り幸福感に包まれました

SCサポーター　大滝照代

前号のアフガニスタンを特集したニュースレターの内容に感激して初めてお便りいたします。冊子の中で園田スタッフが言われていたように、私の知っているアフガニスタンという国は、紛争の絶えない、治安の悪い国という印象しかありませんでした。ですが、16歳で先生ボランティアを務める女の子や、子どもたちの笑顔、学校建設に向けて、食い入るような真剣な眼差しを向けてスタッフと接する村の長老たちがいることを知り、とても幸福感に包まれました。私の寄付金は少額ではありますが、アフガニスタンの教育支援の活動などに私のお金が役立てられていると思うと、とても嬉しく、皆さまには、これからもお元気で活動を続けていただきたく思います。

＊　＊　＊

いつもご支援を本当にありがとうございます。大滝さまからのお便り、スタッフの励みになります。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

SCJスタッフは、ぜひテレビに出演してほしい

会社員　佐野義幸

私は毎日の暮らしの中で、テレビの持つ影響力の大きさを実感することがとても多いです。政治のニュースやスポーツの結果、グルメ番組など情報は、テレビを通して知ったものがほとんどです。でも、SCJの活動はテレビを観ていても流れてきません。そのためSCJの活動を知らない人がとても多いです。

SCJの活動をもっと全国の人たちに知ってもらうために、スタッフがテレビに出演して、伝えたいことをたくさん話すべきです。そうすれば、今よりもっとSCJの活動を支援してくれる人が増えて、貧困や飢餓に苦しんでいる子どもたちを救うことが出来ると思います。

＊　＊　＊

ご意見をありがとうございます。最近ラジオやテレビに露出しましたが、まだまだ全国ではありません。確かに「百聞は一見に如かず」で、生の映像は、言葉をどんなに尽くすよりも影響力があります。映像で伝える広報の努力も続けていきたいと思います。

最近の出来事＆お伝えしたいこと

5月1日（土）～5日（水・祝）の5日間、「第11回10ヵ国大使夫人のガーデニング」がホテルオークラ東京で開催されます。今年も本イベントの収益の一部をSCJにご寄付いただきます。さらに「10ヵ国料理フェスタ」等も同時開催されますので、ゴールデンウィークを東京でお過ごしの方は、この期間にぜひご来場ください。

昨年12月8日、ブルガリより、クリスティーズ・ニューヨークでのオークションの結果、154万6600ドル（約1億4300万円／2009年12月時点）のご寄附をいただきました。昨年の寄附総額900万ドル（約8億3700万円相当）はSCのRewrite the Future キャンペーンを通じて、紛争下における子どもたちへと届けられました。さらに、今年も引き続きSCのパートナーとしてご支援いただくことを発表しています。

現在SCでは、今回お伝えしたハイチ支援に加え、昨年12月から続くモンゴルの雪害、そして今年2月に発生した南米チリの大地震に対しても緊急支援を行っています。チリ地震の緊急支援につきましては、ご支援いただいている皆さまから、今回も多大なご寄付をいただきました。ここに感謝を申し上げます。

SCJのチャイルド・ライツ・センターは、「国連子どもの権利委員会に個人が申し立てできる制度を作ろう！キャンペーン」や児童ポルノ等禁止法改正案の成立に向けたロビー活動など、国内外の子どもの権利の実現に向けた国政への働きかけ（アドボカシー活動）に力を入れています。政府への要望書提出やキャンペーンの状況など、詳細はホームページをご覧ください。

「みんなの声」募集

原稿を400字程度にまとめて、郵便か電子メールでお送りください。氏名とご職業の明記をお願いします。なお原稿は返却いたしません。掲載の場合は一部編集させていただくことがあります。実名掲載が不可の際、一筆お書き添えください。送り先は裏表紙、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン ニュースレター編集係。メールアドレスはvoice@savechildren.or.jpです。いただきました個人情報は責任を持って厳重に管理させていただきます。

Save the Children JAPAN

あたたかいご支援、ありがとうございます。

セーブ・ザ・チルドレンのハイチ緊急支援活動に対し、
3月末時点で、日本の皆さまからのご寄付、約3,300万円を含め、
世界全体で、約57億円が集まり、55万人に対して以下のことを実施出来ました。

これまでの主な支援実績（2010年3月31日時点）

●食糧	250,000人以上に配給。食糧セットの内容は、米、豆、塩、食用油など。
●シェルター・生活必需品	7,500世帯以上にビニールシートなど避難生活に必要な資材、衛生用品、その他の生活必需品を配布。
●保健・栄養	巡回診療チームが23,000人以上の患者を診察。16張りの授乳用ベビーテントを設置。
●水・衛生	221,000人に飲み水など生活用水を支給。設置した仮設トイレ560基、水浴び場349ヶ所、手洗い場101ヶ所。
●子どもの保護	35ヶ所にチャイルド・フレンドリー・スペースを設置。他、家族の再統合の支援。
●教育	ハイチ教育省をサポート。倒壊した学校の調査を実施。仮設学習スペース設置と学用品の配布など。
●生計支援	地域復興に向けた被災者へ仕事を提供。2,500人が瓦れきの撤去作業、雨水の排水路整備などに参加。

これからハイチでは、雨季と多発するハリケーンなどの自然災害で、被災状況が深刻化することが心配されています。また避難民の大規模な移動が起こっており、今回の地震で影響を受けない地域やハイチ国民はいないとも言われています。セーブ・ザ・チルドレンは、被災した子どもやその家族に対し、これまでの緊急支援を続けると同時に、長い目で見た復興支援を計画、教育や生活の立て直しをサポートしていきます。

＜編集後記＞

「安全に暮らせる場所がすべての人に見つかりますように」そう願ったのは、ハイチの「チャイルド・フレンドリー・スペース」に遊びに来ているミシュカ、11歳。表紙の写真の女の子です。ミシュカは「自分は幸せだ」と言います。「住んでいた家にはもう住めないし、大切にしていたお人形も全部なくしてしまったけれど、それでも家族は全員生きているし、夜はテントで体を休めることが出来るから」だそうです。「みんなが幸せになりますように」と祈るミシュカ。ハイチにはきっと、彼女のように優しい心を持った子どもたちがいっぱいいるんだろうな、と思いました。岡田茜（SCJスタッフ）

【この冊子について】皆さまのご支援が子どもたちのためにどのように活かされ、何をもたらしたかをお伝えしたい。そして、子どもたちだけでなく、スタッフやSCJに関わるすべての人々のことを皆さまの近くに感じて欲しい――。この冊子は、私たちのそんな願いを形にしたものです。
表紙写真：©Louise Dyring Nielson/SC Denmark

発行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F
ご支援に関するお問い合わせ：03-6859-0068（平日 9：30-18：00）
印刷協力：日興製版印刷株式会社